HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	フェリクスの「宗教改革」はフガートが多すぎるか
Author(s)	加地, 徹
Citation	基督教学, 23, 32-35
Issue Date	1988-07-18
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/46467
Type	article
File Information	23_32-35.pdf

Instructions for use

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

フェリクスの「宗教改革」はフガートが多すぎるか

加地徹

（一）

フェリクスの[1]「宗教改革」はフガート[2]が多く、メロディが少ないのでオーケストラの楽員は演奏を中止したと一般に知られているがどうしてであるのか、また本当にフガートが多すぎるのか。時代的背景と彼の先輩にあたる作曲家との対位をしてみたい。

(1) Jacob Ludwig Felix Mendelssohn Bartholdy (1809～1847)。

(2) 遁走曲。バッハによって確立された楽曲形式の一。先行する一声部に対して、後続する二声部が対偶主題を提示し、三声部・四声部でこれを展開して作る対位法的楽曲。

（二）

フェリクスは一八二九年作曲を計画、一八三〇年三月革命。「宗教改革」のタイトルははじめからつけたのではなかった。一八三〇年六月の三〇〇年祭はカトリック側の反対で中止。一八三二年にオーケストラの楽員はこの曲がフガートが多くメロディがないことを理由に演奏中止。一八三二年十一月十五日にベルリンで初演。三百年祭とはルターによる宗教改革を記念するものでその始期は①一五一七年の九五条を提起したとき、②破門された一五二〇年、③一五三〇年のアウグスブルグの皇帝カール五世の前での信仰告白発表[1]のときと三つのとらえがあるがフェリクスの時代には③をとり一八三〇年六月二十五日を三〇〇年祭としていた。フェリクスが生存した当代は、ウィン会議（一八一五）、パリ七月革命（一八三〇）二月革命三月革命のときであった。

（三）

哲学者モーゼスを祖父としサロモンを父とした恵まれたユダヤ人の家系[2]に育ったフェリクスは語学に通じ、十二歳で弦楽四重奏曲を作曲、ベートベンの第九をピアノで弾き、第五を弾いたとき「家がくずれ落ちるみたい

だ」とゲーテが言っている。フェリクスは後述のようにユダヤ教でなくキリスト教を宣言したため、すぐれてバッハ、ベートベンを吸収していたためにその民族性と宗教性との類似性のゆえに嫌悪されたのではないか。それで彼はベルリンが好きでなくヘンデル・ハイドンと同じくイギリスへ行きイギリス国民に愛されるのである。バイオリン協奏曲ホ短調や「イタリア」を聴くとき彼の心は海をこえ、山をこえスコトランドとイタリアにあこがれを思っていたと思う。ゲーテが山を越えてイタリア旅行したように。親はツエルター（ジングアカデミーの監督）の後継者にしたかった。二三才の彼は立候補を強調する狙いもあり、三回の音楽会で「宗教改革」などをとりいれるが、多くの反対意見は、①年令の若さ、②経験不足、③長期のベルリン不在、④ジングアカデミーに深くかかわっていない。⑤ユダヤ人であること、そしてメンバーの多くは、このアカデミーはキリスト教の団体であり、指揮者にユダヤ人をすえるのは前代未聞だと拒否したのである。採択でルンゲンハーゲンが多数決できまり、フェリクスは失意のうちにロンドンに、そして「イタリア」を発表し評価され、その聴衆のなかにパガニーニもいた。一八三三年七月二十三日の手紙で「ユダヤ人は解放されました。ポーゼン勅令が批判され、私たちはイギリスの方がずっとよい。天への感謝です。」とある。デュッセルドルフの音楽監督についても前任者の解任を気にし、ルター派ユダヤ教半々のフェリクスにとって音楽は音楽であった。劇場でのオプラ運営や能力の不足、楽団員の不平にもかかわらず、一八三六年五月デュセルドルフの音楽祭で、「聖パウロ」にユダヤ教とキリスト教のかけ橋としてのフェリクスの努力があった。妻セシルはユダノー派であった。ベルリンの楽員はライプチヒの団員より技術的に劣っているとフェリクスは言う。一八四四年ベルリンをはなれて解放感を味う。イギリス人から尊敬され「スコトランド」を作曲する。一八四六年「エリア」を九度目の訪英で初演。一八四七年十一月四月死亡。一八四八年ニューヨークでの追悼式。まさに革命の年である。死後イギリスの音楽界を独占。ジョージグローブの音楽事典はモーツアルトに三二頁、フェクスに六〇頁を記述している。バーナード・ショはワグナーと比べてフェリクスが大家かどうか決めよと賞讃し、ワグナーとフェリクスが個人的知り合いであったことを知る。一九三四年にナチはフェリクスの曲の演奏禁止、楽譜は発禁。現在華やかなバイオオリン曲としてポピュラ

ーなフェリクスのホ短調も、この人の宗教的、人種的そして音楽界における軋轢[3]を思い、「宗教改革」を聴き、その中にフガートが美しく効果的に、ルターのコラールとドレスデンアーメンが美しく流れるのを祈りとして感ずるのである。

(四)

ベートベンの第九の合唱の六五七小節から七六二小節までのアレグロ・エネルギコは長大な二重フーガの部分であり、フーガはテンポがすべることなくはっきりとしっかりと歌われるものである。フェリクスの「宗教改革」の八六からの弦楽器のフォルテはベートベンに負けず力強さをそして希望を与えるものである。フガートは多すぎず、バッハやベートベンに比してより明るさを感じさせるものである。

メロディは少ないか、三三小節からのドレスデンアーメンやニ長調からニ短調への感動的移行は宗教的改心を感じさせるものである。さらに四楽章のルターのコラール「Ein'feste Burg ist unser Gott!神はわがやぐら」では、フルートの敬虔な祈りの導入である。讃美歌集では二六七番「信仰」ルターとあり、ハ長調としてあるがオーケストラでは前章でコントラバスのピアニシモの消えるようなG音を静かに、フルートがアンダンテコンモトで他の楽器が演奏されることなく神に救いを求める。のちにこのテーマは力強く主張される。モーツァルトやベートベンの一つの動機をこれでもかこれでもかと訴えるのとは異なるものである。あの慎ましかで暗示的だが色彩豊かな楽しい管弦法はフェリクスにしかなく、ドレスデンアーメンとルターのコラールを用いることが当時としてはおどろくべきことであった。[4]

フガートが多すぎるか（テープと総譜による対比）

テープ→プリント楽譜の㈡㈧㈢㈭㈫㈦、リベートベンとの対比（第九の合唱部分の六五七～七六二）→フガートを強調している。

メロディは少いか。

ドレスデンアーメン→テープ→プリント④⑤⑥⑦⑧⑨⑩

ルターのコラール→テープ→⑫

(五)

ルターは排斥されるか。「神はわがやぐら」かかる努力により教会と信仰ある家庭とに歌と音楽が始まった。カルビンは音楽を排斥したが、ルターには優しく美しい

自然的な感情が豊かでありこれを正しく養うことの宗教的意義を確信していたのである。[5]

ルターからバッハへの二〇〇年と、そしてフェリクスの受けた圧迫、その作品のなかにある心やさしい宗教心を聴くことができる。

ルターを改革者としてのみ扱い（高校の世界史教科書では免罪符・反抗者としてのみ扱い、長期間で教科書会社との交渉でインドルゲンチアの語を導入させた経験が思い出となるが）ルターをカトリックに対しての扱い、フェリクスをユダヤ人、ジングアカデミーの部外者としてのみ考えるところからは美しい信仰（ルターのコラール）や宗派の心からの理解と一致は困難である。冷たい人達の心から暖かい地中海の「イタリア」を作曲し、「宗教改革」において演奏中止や拒否にあってもその心は信仰の曲であるし、フガートが多いしメロディがないとしたベルリンの人達の心にこそフェリクスの宗教心から遁走・対位するものがあるといわれても仕方ないものである。

(1) 徳善義和「アウグスブルグ信仰告白の解説」聖文社。
(2) ヘルベルトク（ルベルグ「三代のユダヤ人メンデルスゾーン家の人々」横溝訳　東京創之社。
(3) ディールタケルナー「大音楽家の病歴」石山訳、二九頁、音楽之友社
(4) ロスタン「ドイツ音楽」吉田訳、一一二頁、白水社。
(5) 石原謙著作集第六巻、三六〇頁。